



2009年2月25日放送

漢方医人列伝「丹波康頼」

北里大学東洋医学総合研究所 史学研究部 教授 小曾戸 洋

前回は日本の漢方の歴史について概略をお話しました。今回は「漢方医人列伝」の第一番目の人物として、平安時代の丹波康頼と、その著書『医心方』についてお話しします。

丹波康頼の前にも、歴史に名を残している医師は何人もいます。和氣清麻呂の子、和氣広世は医学に長け、日本の宮廷医、和氣家、半井家の始祖となりました。あるいは『大同類聚方』を編纂したという出雲広貞、安倍真直、さらに『金蘭方』を著したという菅原岑嗣といった人物もいますが、伝記といえるほどの資料はなく、著書も残っておりません。

これに対し、丹波康頼は、日本に現存するもっとも古い医学書である『医心方』の作者として永久に名を残した、日本医学史の中でも、トップランクの名医ということが出来ます。しかも、1,000年以上も昔の人でありながら、肖像画も複数伝わって来まして、より実在性を感じることもできる人物です。

丹波康頼は、長徳元年すなわち西暦の995年、4月19日に数え年84歳で亡くなったことがわかっています。84歳といえは1,000年前の平安時代ではとびきりの長寿ということが出来ます。逆算しますと西暦の912年の生まれになります。およそ1,100年前に生まれた人物です。

康頼は中国から来日した帰化人の子孫です。1,800年前、中国後漢の終わり頃の皇帝に靈

帝という帝王がいました。その五代目の子孫に阿智王という人がおり、その人が応神天皇のとき、すなわち五世紀頃に日本に渡ってきたといわれています。その子孫が丹波地方に住みつき、坂上姓を賜りました。康頼はその子孫で、丹波国の出身です。医療・医学に精通し、京に召されて丹波宿禰の姓を賜り、針博士、医博士、左衛門佐、左兵衛医師、丹波介、従五位上の位に進みました。天元5年、西暦982年に『医心方』全30巻を編集し、永観2年、西暦984年にこれを時の上皇、円融上皇に献上しました。何しろ千年以上も前のことから、康頼の伝記として知られるのはこれくらいのことです。しかし、この『医心方』の著述は高く評価されまして、その功績により、丹波家は宮廷医もしくは医師の名家として以後1,000年続くこととなります。日本の宮廷医の名家にもう一家和氣氏があります。先ほども触れました和氣清麻呂の子、和氣広世を始祖とする家系です。和氣と丹波の二家を、和丹の二家といいまして、この二家が以後ずっと宮廷の医療を担当することになりました。康頼はその丹波家の初代として肖像画が作られ、丹波家で祭られました。1,000年前の画像は残っていませんが、古いものでは南北朝時代の延文元年、西暦1356年に写された肖像画が現在に伝わっています。髭を蓄え、威風堂々たる姿をしています。

『医心方』が著された1,000年前には、まだ日本では医学書を印刷出版するということも行われていませんでした。当時は書物は手で書き写し、その形態も今のような冊子本ではなく、お経の形をした巻物でした。

その平安時代に手で書き写した巻物が、幸い現在に伝わっています。千年前の現物が人の手から手へとつたわったことは奇跡に近いことです。現在、東京国立博物館に所蔵され、国宝に指定されています(一部は民間に流出)。長いこと半井家に所蔵されていたので、通称、半井本『医心方』と呼んでいます。

平安時代に写された別の『医心方』も伝わっています。京都の仁和持に伝えられましたので、仁和寺本『医心方』と呼んでいます。こちらも国宝に指定されていますが、残念なことに全30巻のうち、5巻分しか残っていません。

さて、『医心方』の内容ですが、全部で30巻。医学の全領域を網羅してしまっていて、本草学すなわち薬学、あるいは養生学、そして性医学にまで及んでいます。ざっと全巻の内容を御紹介しましょう。

巻1には、医学総論薬学総論が述べられています。

巻2には、針灸療法について書かれています。針灸をはじめに置くということは、針博士であった康頼ならではの考えでしょう。

巻3は外邪である風、風による病です。古くから、風は万病のもとといわれ、恐れられていました。

巻4は、髪、頭部、顔面部などの疾患について書かれています。

巻5は、耳、目、鼻、歯、咽喉の病気

巻6は、胸部、腹部、腰などの疾患。また五蔵六府の内臓について書かれています。

巻7は陰部、肛門、痔など。

卷8は、足、指などの疾患。

卷9は、咳、嘔吐などの疾患。

卷10は、積聚、癥瘕など、しこりやつかえの疾患です。

卷11は下痢の病。

卷12は、大小便の異常疾患。

卷13は、虚勞、身体の疲労、衰弱の疾患。

卷14はから卷18までは、急死、流行性疾患、できものなどの皮膚疾患、外傷などの雑病が記されています。

卷19、20は、服石という、鉍物薬の服用法と、その副作用の対策法が記されています。

卷21から24までは、婦人病、産科関連の対処、治療法。

卷25は小児科について書かれています。

卷26は保健、衛生学。

卷27は養生学。

卷28は房中、房内と呼ばれる男女の性交に関する性の医学が述べられています。

最後の卷29、30には食べ物の選定、鑑別、いわゆる食品学、栄養学でしめくくられています。

これら『医心方』の記述のほとんどは、百数十種類に及ぶ、中国の六朝時代、隋・唐時代の医学関連書からの引用で成り立っています。一部には古代朝鮮医書からの引用もあります。

病気の分類法は基本的に隋の『諸病源候論』に基づいています。これらの引用書の多くは、すでに失われて今日に伝わっていないため、唐以前の中国医書のない洋右を知るうえでかけがえのない資料となっています。

中国では宋の時代になってから医学書が印刷出版されるようになり、それ以前の古い医学書は失われました。『医心方』は印刷になる前の中国医書の形と内容を忠実に伝えているのです。

このように、『医心方』は中国唐以前の医学の集約というべき本ですが、その編集方法には日本人らしい捨捨選択の目も反映されています。たとえば、引用にあたって陰陽五行説や、脈の繁雑な理論など、観念的・思弁的な部分は多く省略されています。また食品の選別や解説にも、当時の日本の事情がみてとれます。論理、理屈よりも、実用性を優先した日本の個性のあらわれといえるでしょう。康頼には、帰化中国人の子孫としての自負もあり、日本人としての自覚もありました。『医心方』にはその両面があらわれています。

『医心方』にまつわるエピソードは多くあります。前述の国宝半井本は、室町時代、天皇家から丹波のライバルである和気の子孫、半井家に譲り渡されました。丹波の子孫である多紀家は、これを奪い返すべく、やっきになりました。そして江戸時代の終わりに至り、とうとう半井家から借り出すことに成功し、出版(1860)にこぎつけました。これによってそれまで秘密であった『医心方』がはじめて世の中の人々に知られるようになったのです。

原本は著わされてからちょうど一千年後の昭和57年、国に買い上げられ、昭和59年に国宝に指定されました。原本の写真版も今日出版されています。これらを利用できるわれわれは、まことに恵まれた環境にあるといえると思います。